

地域の言葉に触れ、 多様性を受け入れて、 地域に誇りを持つ人に

東北学院大学教養学部言語文化学科 教授
シェイクスピア・カンパニー 主宰

下館和巳 しもだて・かずみ

宮城県塩竈市出身。国際基督教大学大学院博士前期課程修了。後期課程2年目から、東北学院大学に奉職。1992年にシェイクスピア・カンパニーを結成。イギリス・ケンブリッジ大学客員研究員なども務めた。

シェイクスピア・カンパニー プロフィール

「東北での劇場建設を」という目標の下に集まった人々の組織を母体として誕生。東北各県の出身者、宮城県在住者をメンバーとし、仙台を拠点に活動している。東北の歴史や言葉を生かした新たなシェイクスピア劇を上演。



地元宮城県に戻り、劇団を旗揚げして25年が経ちました。東北各県を話の舞台とし、セリフに方言を取り入れたシェイクスピア劇を上演してきて思うのは、グローバル化と言われる中、世界と最もつながっているのは、実は私たちが住む地方ではないかということです。インターネットが普及し、世界のどこにいても大抵の情報はすぐに手に入る時代にあって、求められているのはそこにしかないオリジナリティーであり、触れなければ感じられないものです。その1つが方言ではないでしょうか。

そう思う原点は、学生時代に留学先のイギリスで見た演劇にあります。多くの作品が方言を用いており、言葉の多様性が受け入れられていました。共通語の使用が通常だった日本の演劇との違いに衝撃を受け、自分にとってコンプレックスだった方言への意識が変わりました。私たちの劇団は東北にあるのだから、東北の言葉を使えばよいのだと気づいたのです。

セリフは方言の後に役者が続けて

同じ意味の共通語を言い、翻訳する形で進めます。方言を使うのだから、舞台もイギリスではなく東北にしました。すると、難解と思われていたシェイクスピア劇が親しみやすいものになり、子どもから高齢者まで楽しめる舞台になりました。

海外の文化や伝統は外国人との交流上の共通言語となり、会話を一気に広がりあるものにします。劇団が国際性と地域性を兼ね備えていると評価され、地元の中学1年生が「総合的な学習の時間」で私たちの作品に取り組み、学園祭で上演しました。舞台の背景や方言について地域の人から

学ぶことは地域学習になり、英語劇を上演すれば英語学習にもなります。今後、他校にも広がり、地域のよさを学ぶ機会になることを期待しています。

方言だからこそ伝わる癒しや励ましが東日本大震災からの復興の力となり、今、方言の重要性が再認識されています。現行課程に続き、次期学習指導要領にも、国語に「共通語と方言との違いを理解すること」(小学5・6年生)、「共通語と方言の果たす役割について理解すること」(中学1年生)と示されました。世界の多様化が加速する中、多様性を受け入れ、地域に誇りを持つ人を育ててほしいと思います。

近未来への布石 地域性を生かしたシェイクスピア劇



公演作品は下館教授が原作を基に翻訳・翻案。「恐山の播部蘇(マクベス)」「奥州幕末の破無礼(ハムレット)」等、原作の内容と東北の歴史を重ね合わせて舞台を設定し、選んだ地域に合わせた方言をセリフにしている。2018年は、アイヌのアーティストとの共同作品「アイヌ 旺征露(オセロ)」(写真)を公演。2016年に出版された10作品の脚本は、文化庁「平成27年度被災地における方言の活性化支援事業」に採択され、宮城県・岩手県・福島県の沿岸を中心とした中学校・高校200校に寄贈された。